様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月　 １ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2013
課題番号：２４７２００９５

研究課題名（和文）引用人名・書名より見る『黄氏口義』の学史・文化史的意義

研究課題名（英文）A significance of "Kohshi-Kugi" in the scholarly and cultural history, viewed from its citing

研究代表者
蔦　清行（TSUTA, Kiyoyuki）

大阪大学・日本語日本文化教育センター・准教授

研究者番号：２０４５２４７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　900,000円、（間接経費）　270,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究課題は、室町時代の抄物『黄氏口義』に、どのような禅僧の説が流入し、またかれらがどのような内外の参考書でもって学んでいたのか、ということを調査し、体系化することを目的としていた。そしてそのための手段として、『黄氏口義』に登場する禅僧や彼らの著作を中心とした人名・書名索引を作成することを計画していた。
　2014年3月31日、その人名・書名索引と解説とを含む報告書を作成した。これによって、抄物が多くの研究者にとってより利用しやすいものになった。つまり、室町時代の禅僧たちがどのように中国の書物を研究していたのかを明らかにする基盤が整ったと言えるのである。

研究成果の概要（英文）：This subject is aimed at investigating which zen priests' theory flow into "Kohshi-Kugi", and systematizing their both domestic and international references. And as a means therefor, I planned to make an index of zen priests' names and their works which appear in "Kohshi-Kugi".
At 31th of March in 2014, a report booklet has completed, which contais the index and a commentary on the material. This index has enabled a lot of researchers to use Shoh-mono materials much easier. We are ready to investigate how zen priests in Muromachi period studied both Japanese and Chinese references.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：抄物　五山僧　五山禅僧　日本語史　国語学

１．研究開始当初の背景

『黄氏口義』は、室町時代、黄山谷の詩に対して付けられた抄物である。黄山谷の抄物は多くのものが残っているが、『黄氏口義』はその中でも、次の二つの点で、極めて重要なものである。

イ、分量が二十二巻と多い。
ロ、引用されている禅僧・内外の書物が多数に上る。

研究代表者は、この研究課題に着手する以前に、他の諸本との関係を中心に、研究を進めてきており、一部の成果は「両足院所蔵の黄山谷の抄物二種」（第一〇二回訓点語学会研究発表会口頭発表。機関誌『訓点語と訓点資料』第百二十五輯に要旨を掲載）として発表している。

その発表においても、多数の禅僧の説が利用されていることを強調した。しかし本資料は分量があまりにも膨大であるため、書物のどこにどの禅僧や書物が引用されているのか、把握することは容易ではないという問題があった。そもそも、抄物というものが国語学的な研究のための用例を提供するためのものとしか見なされてこず、内容面に注目されることがあまりなかったことも相俟って、この分野に関する研究は皆無と言ってよいレベルにあった。

２．研究の目的

『黄氏口義』の人名・書名索引を作成し、本資料が学史的・文化史的にどのように位置づけられるか明らかにすることが、本研究の目的である。それはまた、本資料が言語資料としてだけでなく、文化的な資料としても活用しうるようにもすることになるであろう。

イ、『黄氏口義』に引用されている禅僧・内外の書籍・およびそれに登場する人物の、網羅的な索引を作成する。

禅僧の中には、道号・法諱以外に複数の号を持つ者も多い（例えば、瑞渓周鳳は、高校の歴史の教科書に載るほどの重要な禅僧であるが、刻楮子・臥雲山人・北禅などの別号を持つ）ため、その仕分け作業も行う必要がある。

ロ、作成された索引に基づきながら、本資料が学問史的・文化史的にどのように位置づけられるか明らかにする。

先述の通り、本研究のような課題は、これまでほとんど顧みられることのなかったものであり、大いに独創的なものである。従来は国語学的な研究のために用例を提供するだけの存在であった抄物を、それ自体ひとつの文学的な、あるいは注釈書的な資料と認める点に、その学術的な特色を認めることができる。

ただし、単に独創的であるだけであることは、それ自体では価値を持たない。しかし本研究の場合、その研究結果は、そこに登場する先行の禅僧の説や、内外の書物との影響関係を研究する基礎とすることができる。これによって、従来は殆ど国語学者のみの専有物であった抄物が、日本文学研究者や、中国文学研究者、あるいは和漢比較文学などの研究者に対して、開かれたものとなるであろう。

例えば、『太平記』において表明される人物評と、抄物に見られるその人物に対する評価とを対照することによって、『太平記』作者の教養の範囲を限定しようとする研究が既に存在している（森田貴之「『太平記』の漢詩利用法　―司馬光の漢詩から―」（『国語国文』第七十九巻第三号、二〇一〇年三月））。氏の論文では蘇東坡の詩に対して付けられた抄物『四河入海』を利用しているが、網羅的な索引があれば、より広い範囲での影響関係を考えることが可能になるはずである。

また、これまでの研究から、禅僧達の多くは、史記・漢書を始めとする史書や経典類（四書五経など）を直接参照していたのではなく、『事文類従』や『詩人玉屑』などの類書を参照していたことが判明している。どのような類書がよく使われたのか、ということは、当時の学問がどのようなものであったか、ということを明らかにすることにつながる。そして『黄氏口義』に引用される、五山僧達の利用していた類書は、同時代の他の学問分野と比較して、どのような特徴があるのか。このようなことも、本研究の結果から明らかになるであろう。

まとめて言えば、抄物という資料を多くの分野の研究者に開かれたものとし、同時代の日本における文学と学問のあり方をあきらかにできること、そして、そのようなものとして抄物という資料をとらえ直すことが、本研究の意義であると言ってよい。

３．研究の方法

本項目では、上記の研究目的に即し、具体的な研究の方法と、そのような方法を取るに至った考え方の概略を記述する。

３−１，収集対象の画定

索引の作成に当たり、どの程度までを収集対象とするかを、慎重に検討した。その結果、全人名・全書名を立項するのではなく、五山禅僧とその著作に限ることとした。これは、中国側の書名・人名について、たとえば三皇五帝のような伝説的な存在までをも「人名」と解するかどうか、あるいは『十七史』のような総称的な書名も一つの項目を立てるかどうか、などの問題について統一的な方針が立てにくかったこと、そして、すべての項目を検索可能にするとなると、総項目数がおよそ 20,000 項目となり、限られた期間と労働

力では完成が困難になると判断されたからである。

項目を五山禅僧とその著作に限ったのは、本研究の第一の目的が、この『黄氏口義』という資料がどのように成立したかについての手がかりを得るところにあるからであり、そしてそれは最も直接的に見れば、五山禅僧たちの講義の集成と考えられるからである。したがって彼らの名前と著作とが検索可能になれば、本資料を直接の材料に還元することができるようになり、それらの相互の関係についても自ずから明らかになると考えたのである。ここで想定されている利用層は、第一には日本語学・国語学の研究者であり、そして第二には日本文学、特に和漢比較文学研究者や、五山文学の研究者である。中国文学の研究者にも役立てられるようなものを作ることも考慮されたが、あまりにも範囲を広げすぎると研究期間中に作業を終えられないことは明白であり、今回の研究課題としては断念せざるを得なかった。これについては今後の課題としたいが、五山禅僧とその著作だけに限っても、その利便性は大なるものがある上、この種の索引はこれまで全く作られたことのないものであるから、この分野の研究史において一つの画期をなすものということができる。

３−２，全巻にわたる用例の収集・データベース化

実際に用例の収集を行う段階である。用例の分布位置は巻・丁・行で管理する。データベース化にはコンピューターを用いる。特定の人名・書名などが、どこに、どれ位の数分布するのかを、検索することができるようにする。

二十二巻、千四百丁に近い資料のため、申請者だけで用例を収集するのは負担が大きい。抄物を読むことに習熟した研究協力者を雇用し、巻毎に分担してデータベース化の作業を行う。当初は三名の大学院生・研究員（OD）を想定していたが、本資料の読解は予想以上に困難なものであり、結果的には二名の専門的研究者（大阪大学日本語日本文化教育センター非常勤講師）のみに協力を依頼した。

人名・書名の固有名詞の抜き出しは、実際に本文を読んで判断しなければならないため、全巻を研究代表者と熟練した専門的研究者によって行う。この作業に要する時間は、一巻（平均八〇〜一〇〇丁前後）あたりおおよそ六時間程度であった。総延べ時間数では一二〇時間程度となった。研究協力者たちは、標識を打たれたその固有名詞を抜き出し、データ化する部分までを担当した。抜き出し作業が全巻分完成する前に、逐次データ化を進め、効率化を図った。

３−３，異なる名前で記された同一人物・同一書目の名寄せ

禅僧の中には、道号・法諱以外に複数の号を持つ者も多い（例えば、瑞渓周鳳は、高校の歴史の教科書に載るほどの重要な禅僧であるが、刻楮子・臥雲山人・北禅などの別号を持つ）ため、その仕分け作業を行う。たとえば今の瑞渓周鳳の例で言えば、「瑞渓周鳳」の項目の他、「刻楮子」・「臥雲山人」・「北禅」などの項目でも検索できるようにする。これは、どれがどの人物の別号であるか、あるいはある人物がどれだけの別号を有しているか把握している必要があるため、誰にでもできる作業ではなく、この分野の資料に習熟した者が判定を行わねばならない。索引を作る必要性は多くの研究者に認められていると思われるが、実際に作業が進められていない原因は、この辺りにも存在しているのである。なお、先ほどの例の場合、「瑞渓周鳳」の項目には「→刻楮子・臥雲山人・北禅」などのようにして、複数の項目を参照する必要があることが示されることになる。

このように、本索引における固有名詞は、単に資料から抜き出した名称を項目とするだけでは十分ではなく、それらがどのように有機的に関連しているかを明らかにする必要がある。それによって、完成する索引がどれほど有用になるかが決定するのである。

３−４，索引・研究報告の発表

完成した索引の総項目数は約 3500 項目であった。これは二段組みにして印刷すると、およそ 60 頁程度になる。また本資料はこれまであまり広く知られていない資料であるので、【解説篇】として、当該資料の学史的・文化史的位置づけを明らかにする研究報告を執筆する。これは、今回作成する索引がどのように利用されうるのかということを明らかにするものでもある。

具体的には、この研究報告は、当該資料に引用される禅僧名・書名等が、同時代の他資料と比較して、どのように共通し、どのように異なるのかを明らかにする。またそれによって、本資料がどのような研究分野にとって有用なものとなりうるのか、検討する。索引は、日本語学や日本文学の研究者にとっては有用性の明らかなものと信ずるが、それがどのような方法で有益なものになるのか、ということは、必ずしも明確でないであろう。索引がどのように利用でき、それを用いて実際にどのようなことを明らかにできるのか、ということを簡潔に紹介したいのである。

これらは本来、研究代表者の所属大学の紀要、あるいは所属学会の機関誌に投稿する形で発表し、多くの研究者が利用できることになることが望ましい。しかし、研究報告はともかく、索引については、これだけの頁数のものを掲載することは、ふつう、現実的でない。紙媒体としては研究報告を印刷して関係諸機関に配布することとし、データはインターネットを通じて、何らかの形で広く利用できるようにする。

本研究の意義は、文化的な資料として活用する基盤を整えるところにあると考えている。従って、単にモノとしての索引を整えるだけでなく、それを利用できる環境および簡単な手引きを用意することも必要なのである。

４．研究成果

本研究課題は、室町時代の抄物『黄氏口義』に、どのような禅僧の説が流入し、また彼らがどのような内外の参考書でもって学んでいたのか、ということを調査し、体系化することを目的としていた。そしてそのための手段として、『黄氏口義』に登場する禅僧や彼らの著作を中心とした人名・書名索引を作成することを計画していた。

2014 年 3 月 31 日、『引用人名・書名より見る『黄氏口義』の学史・文化史的意義研究成果報告書を作成し、研究成果として報告した。この報告書は、【解説篇】として『黄氏口義解題』を、また【索引篇】として「黄氏口義人名書名索引」を含むものであり、当初の目標は計画通り達成された。

今回作成した人名・書名索引は、研究機関や予算などの制約もあり、五山僧関係に限定されたものである。しかし彼らの説の基盤にあるのは、いうまでもなく、中国で作成された注釈や、舶来の学説である。しかもこれまでの研究から、禅僧たちの多くは、史書や四書五経を直接参照していたのではなく、『事文類従』や『詩人玉屑』などの類書を参照していたことが判明している。どのような類書がよく使われたのか、ということは、当時の学問がどのようなものであったか、ということをより鮮明にあきらかにすることにつながるであろう。これらは、今回の研究に含めるには至らなかったが、今後の課題として継続的に取り組むことが望まれるものである。また『黄氏口義解題』は、既に大塚光信氏が『続抄物資料集成』第十巻（1992 年）に諸本の紹介という形で優れた解説を提出しているが、本解題はそれを『黄氏口義』に特化する形でより精緻化したものと位置づけられる。特に、『黄氏口義』と『山谷幻雲抄』・續抄物資料集成本『山谷抄』・『黄烏鉢抄』などとの関係について明らかにした部分は、これまでの研究成果にあらたな一面を付け加えたものと位置づけられる。

以上、本研究課題の成果をまとめて言えば、抄物という資料を多くの分野の研究者に開かれたものとし、五山禅僧たちの学問的交流や相互の関係をあきらかにする基盤を整備したこと、そして、そのようなものとして抄物という資料をとらえ直すきっかけとした、ということになる。研究代表者は、それが、国語学的な見地からはもとより、文化史的・学史的にも、大きな意義を有すると信ずるものである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔その他〕

<u>蔦清行</u>『「引用人名・書名より見る『黄氏口義』の学史・文化史的意義」研究成果報告書』、2014 年 3 月

６．研究組織

(1)研究代表者

蔦　清行（大阪大学日本語日本文化教育センター准教授）

研究者番号：20452477

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者

山中延之（大阪大学日本語日本文化教育センター非常勤講師）